

○ムジナモ発見百周年記念碑 (小宮定志) Sadashi KOMIYA: Monument celebrating the centenary of the discovery of *Aldrovanda vesiculosa* in Japan

牧野富太郎先生が、明治23 (1890) 年5月11日武州伊豫田村 (現在 江戸川区北小岩4丁目) の江戸川右岸の河川敷でムジナモを発見されて、本年がちょうど100年目となります。この節目にあたり先生の偉業を称え、この事実を永く後世に伝えたいと願い、併せて食虫植物研究会創立40周年記念事業の一環として、その発見地に「ムジナモ発見百周年記念碑」の建立を計画しました。幸い、水草研究会 (大滝末男会長) と地元の有志に相談致しましたところ、ぜひ実現したいと話がまとまり、まず、河川敷使用について江戸川区長に助力をお願い致しました。その後、建設省の了承が得られましたので、上記3者が共同で「記念碑をつくる会」を結成し、再三区役所や建設省側との折衝を続けながら、同時に建立のための募金を始めました。その結果、多数の方々からご協賛をいただき、予定通り準備も整いまして、去る6月10日に碑の除幕式を挙行政致しました。

当日、牧野家ご親族の方々のご臨席をいただき、特に、先生の末娘であられる岩佐玉代様には除幕にも加っていただきました。記念碑は小岩菖蒲園の一隅に建立されたのですが、同菖蒲園祭りと併催となったため数万人の人出で賑わいました。

牧野先生 (当時28才) がヤナギの果実を採集中、偶然にムジナモを発見された逸話は余りにも有名で、発見の翌月発行の植物学雑誌4巻40号に “*Aldrovanda vesiculosa* L. 日本否ナ東京近郊ニ産ス” と報告し、11月の同誌4巻45号で “ムジナモ” という和名を

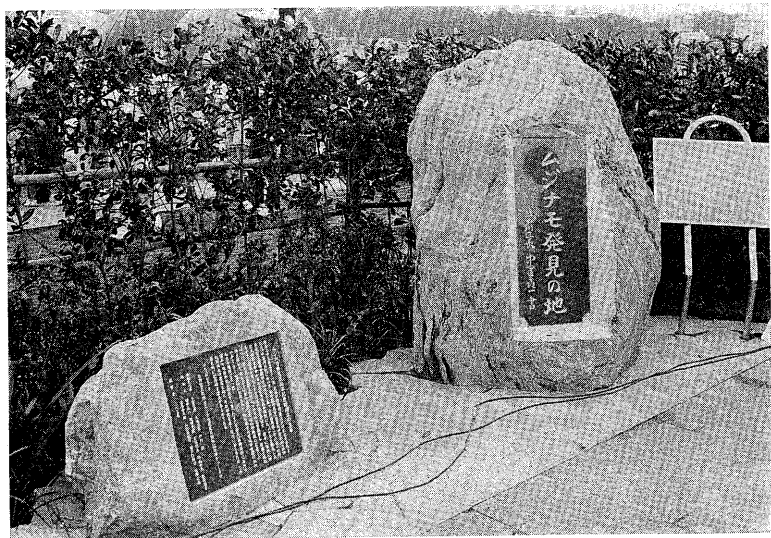


図1. ムジナモ発見百周年記念碑.

発表されました。そして翌年 7 月、ムジナモ開花の報せを聞き直ちに現地へ駆けつけ、幻の花とされていたムジナモの開花株を採取され、精緻な解剖図を描いて 1893 年 10 月発行の同誌 7 巻 80 号に第 11 図版として公表されました。この図がエングラー編“プランツェンライヒ”などに引用され、先生の名声为世界に知れわたる端緒ともなりました。先生ご自身も「ムジナモ発見」については感銘が深かったようで、1928 年 2 月発行の植物研究雑誌 5 巻 2 号「我日本ニ於テ学会ニ興味ヲ与ヘシ植物発見ノ略史」の中で“明治二十三年ニむじなもガ発見セラレタノハ正ニ青天ノ霹靂ノ観ガアツタ……”と述懐されております。
(日本歯科大学 歯学部)

□ Weberling, F.: **Morphology of flowers and inflorescences** 405 pp. 1989. Cambridge University Press, London. ㍩ 55. 本書は Eugen Ulmer から出版された *Morphologie der Blüten und der Blütenstände* の英訳本である。翻訳は R.J. Pankhurst (British Museum) による。顕花植物に関心をもつ人々にとって花と花序は興味のつきない対象である。にもかかわらず最新の研究成果を踏えて書かれた日本語による適切な参考書は皆無であるし、英文によるものも一長一短であった。本書は花と花序をつくる諸器官ならびに子房の発生、由来、合着、機能などについて広範囲な概説を試みたものである。翻訳ということもあって文章は平易であり、形態学について多くの知識をもたない人でも、術語集(6 ページにわたる)や図解を参考に一通り読むことができる。熊沢正夫著「植物器官学」に相対する好参考書として本誌の読者の多くにお薦めしたい。
(大場秀章)

□ Ellis, M.B. & J.P. Ellis: **Fungi without gills (Hymenomycetes and Gasteromycetes)** — An identification handbook 329 pp. 1990. Chapman & Hall, London. ㍩ 11,400. 子実層托がヒダを形成しない菌蕈類(キクラゲ類, ヒダナンタケ類のほかアミタケの類も含む)と腹菌類の同定手冊である。277 属 974 種を載せ、多くは英国の普通種である。巻末の 49 図版に 543 図の線画も載せるが、中心は実際の検索表と要を得た記載にある。今日的なパッと見てパッと判かるように工夫された美しい図鑑も、確かに便利で大切である。しかし、野外で見つけた宝物のようなキノコを、丹念に記載とつきあわせながら特徴を理解し名前を調べるように作られた本書も、ゆったりと自然や生き物とつきあう人のために大切であろう。路傍に座りこんで記載に読み入ったり、床に胡座をかいて顕微鏡をのぞいた、時間がまだ一杯あった学生時代に出会いたかった本である。
(三浦宏一郎)